■ Culture

石ノ森章太郎「新装版マンガ日本の歴史10　南北朝動乱と足利義満」(中公文庫) ©石森プロ　京の北朝と吉野の南朝による「一天両帝」時代を経て、足利義満が南北朝を合一した激動の時代を描く

現在の京都御所が内裏

現在の京都御所は14世紀以降、北朝天皇の内裏（皇居）だった場所だ。もとは天皇の仮の御所「里内裏」だったが、鎌倉時代末期の1331年に光厳天皇が住まいと定めた。南北朝合一の際に、南朝から三種の神器が戻り、名実ともに内裏として使用されるようになった。

一方、義満が京都で営んだ新邸「花の御所」も内裏に近接している。朝廷への影響を重視する義満が、内裏に近い地を拠点に選んだとみられ、天皇と将軍の親密な関係を演出し、幕府の権威を高める効果を目指したと考えられる。

1467年に勃発した応仁の乱の際、天皇が一時、将軍御所に避難することもあった。石原准教授はこの時の同居によって、「両者の交流の『儀礼性』を失わせ、将軍の権威低下につながった」と指摘する。室町幕府末期、織田信長は将軍就任を支えた15代義昭に対し、天皇家や朝廷に尽くすことを求めた。将軍の「『王家』の執事」としての役割がすでに形骸化していたことを、次代の覇権を担う信長は見抜いていたのだろう。

＊ 歴史研究が深まるにつれて日本史のトピックは見直されています。「日本史アップデート」では、研究成果を反映した最新説を、広く知られた従来説と比較しながら紹介します。「世界史アップデート」と隔週で掲載の予定です。